

歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 10＞ junaida

小林 貴子 選

雀にはわかる天候麦の秋
（いわき市）岡田 木花
ホセ・ムヒカ天に召されし聖五月
（川越市）吉川 清子
あらわかりましたか妻と新茶かな
（福岡市）犬山 裕之
逆走の大統領に道をしへ
（横浜市）御殿 兼伍
蛭蟻のこともあらうに遠出かな
（東京都世田谷区）須藤 渉一
この先に滝があります猿出ます
（京田辺市）加藤 草児
風五月赤ちやん同士分かれ合ふ
（さいたま市）齋藤 紀子
のけぞつてやうやく脱ぎし竹の皮
（合志市）坂田美代子
昇進は望まぬ世代五月間
（浜松市）久野 茂樹
苛立ちてバイク走らす夏近し
（茨城県河内町）吉村 巖

【評】一句目、小さい雀だが本能も知恵もいっぱい。二句目、ウルグアイの元大統領に多くを教えられた、感謝。三句目、新茶であることに夫が気づき、妻は夫を見直している。四句目の「道をしへ」は昆虫のハンミョウ。正しく導いてほしい。

長谷川 權 選

母の日も母は泣きますガザの母
（筑紫野市）二宮 正博
大皿に盛るたのしきも初鯉
（静岡県河津町）岩城 紀子
五十年続く二人の鮑魚
（茅ヶ崎市）清水 吞舟
ガザの子の骨ばかりなる裸かな
（嘉麻市）松井 春光
執刀医水やうかんでも受け取らず
（栃木県壬生町）あらゐひとし
老人に酒食は大事初鯉
（加東市）藤原 明
麦を刈る人それぞれに故郷あり
（岡崎市）澤 博史
筋肉を競ひ合ひをる実梅かな
（小田原市）関野 憲司
紀の国は日本のブータン風薫る
（和歌山市）佐武 次郎
黒潮やケンケン舟で鯉追ふ
（京田辺市）知野 忠宏

【評】一席。爆撃と飢えで次々に死んでいく子どもたち。自分に何が起きたのかさえ知らず。二席。大きな皿でなくては。だからこそ楽しい。三席。夫婦二人の鮑魚とり。やはり人間の世界はすばらしい。十句目。鯉の引き縄舟。昔ながらの漁法。

大串 章 選

風鈴の南部恋しと鳴りやます
（取手市）金田 好生
父白寿麦酒飲み干し逝きにけり
（大村市）小谷 一夫
草ぐさの雄たけび上ぐる夏野かな
（長崎市）佐々木光博
昭和史に銃後の言葉沖縄忌
（石川県能登町）瀧上 裕幸
活け締めめ鯉の燻々たるまなこ
（東京都足立区）望月 清彦
半農の田植時なる土日かな
（東京都練馬区）金子 文衛
兜太の碑死角に牡丹の花ひらく
（新座市）丸山 巖子
旅人のタトゥーゆきかふ薄暑光
（広島市）金田 美羽
見馴れたる伊吹に夏の兆しかな
（尾張旭市）古賀勇理央
動物の墓へ合掌遠足子
（町田市）岩見 陸二

【評】第1句。「南部恋し」と鳴り続ける「風鈴」は岩手県盛岡で作られた「南部風鈴」、高く澄んだ音色が美しい。第2句。99歳の父上は好きな麦酒を飲み干し、天寿を全うされたのだ。頭が下がる。第3句。「雄たけび上ぐる」が言い得て妙。

高山れおな 選

文明に酒と楽器と祭あり
（さいたま市）齋藤 紀子
万緑の岐谷に村沈みたり
（尾張旭市）小野 薫
百笑の路地に川風夏夕焼
（高知市）戸梶 優子
大夏木語るや森の千年史
（高松市）信里由美子
たつた今夏之介の夏来たりけり
（横浜市）正谷 民夫
加藤さんも死んだ新宿は夕焼けて
（東京都新宿区）各務 雅憲
水の輪の大きなことよ蜻蛉生れ
（静岡県東伊豆町）小沢 勝正
骨上げの余熱手にあり梅雨曇り
（いわき市）岡田 木花
雀の子河内音頭の輪の中に
（八尾市）宮川 一樹
首振つてネクタイ外す薄暑かな
（国分寺市）毛利 親雄

【評】齋藤さん。シンギュラリティが現実の日程にのぼる現在に、文明の原点を振り返る。たとえば論語には酒と音楽と祭祀の話が頻出。小野さん。岐谷/枝谷を言うことで圧倒的な緑を印象付ける。戸梶さん。百笑は四万十市の地名とのこと。

うたをよむ 六甲山新緑夢譚

みどりのゆめばなし

三村 純也

阪神間に住んでみると、六甲山系の新緑、それが深まるともに、朴、山法師などの花々、様々な鳥の音が楽しめる季節が最も清々しく感じられる。芦屋にお住まいで、山荘をお持ちだった稲畑汀子先生も、そうだったのではないかとと思う。万緑に朴の一樹のありどころ。汀子昭和五十四年、私を幹事として、汀子先生を囲む二十代の句会が出来、虚子の時代に倣って、夏行と称する夏季鍛錬会を開催することになった。一回目は昔屋の汀

子邸に二十名前後が泊まり込んだ。一回目は稲畑家の六甲山荘でということになったのだが、「古いね、しばらく使っていないし、大勢泊まれるかどうか、純也君、下見に行かないか」という電話をいただいた。五月下旬、先生のお車に同乗し、稲畑山荘を訪れた。「INABAAT」と書かれた門標があり、フランスとの貿易で財を成された先祖が、「INAHATA」では「いなあた」と発音されるので、こう記されたと同った。山荘

は建物自体も内装も実に素晴らしく、先生の懸念は杞憂に終わった。雑魚寝ならみんな泊れる夏座敷。汀子「折角、ここまで来たのだから、ちょっと吟行して帰ろうか」というお誘いのままに、山道を散策した。この山道はじめて通る時鳥。汀子先生と二人きりで吟行したのは、後にも先にもこれ一度。下山の車は六甲名物の霧に包まれようとしていた。先生が逝かれて三年余り、書斎の窓から六甲を眺めては、あの幻のような一刻を思い出す今日この頃である。

（俳人、「山茶花」主宰）

長谷川權著『「おくのほそ道」を読む 決定版』「かるみ」という境地を見いだした芭蕉の旅と思考の軌跡をたどる。原文、現代語訳、解説などを収録。（ちくま文庫・1100円）

◇朝日俳壇 入選取り消し 6月8日付の俳壇に掲載した「母の日の母を泣かせて仕舞けり」は、酷似した先行句がありましたので、入選を取り消します。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（週に2作品まで）。QRコードから。